

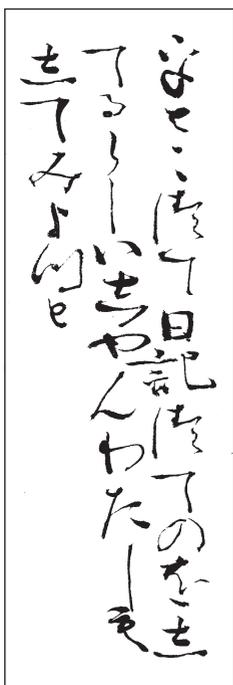
くずし字を楽しく学ぶための教材の開発

——第二言語習得理論を参考に『定家本 〇〇』を作成する——

福 嶋 健 伸

一 くずし字を楽しく学ぶための教材

まず、(1)のくずし字をご覧頂きたい。見紛うことなき定家様である。



では、何と書いてあるだろうか。少々面白い内容なので、もしよろしければ、翻字に挑戦して頂きたい。先ほどの(1)を翻字すると、次のようになる。

(2)

乎止已徒天日記徒天乃遠志 天留良之以志也无和太之毛 志天美与川止	をところつて日記つてのをし てるらしいしやむ(ん)わたしも してみよつと
--	--

男って日記つてのをし
てるらしいじゃん。私も
してみよっと

つまり、(1)は、現代日本語の文章を「定家様」にしたもののなのである。このような、「現代日本語をくずし字にした教材」であれば、学習者も楽しく学べるようである。

本稿では、このような教材を開発した背景と、その特長や広がりについて述べたい。

二 英語は読めるが日本語は読めない

果たして、くずし字を読める人は、日本にどれだけいるのだろうか。もちろん、「きそば」「すし」「(御)てもと」程度であれば問題なかるうが、ある程度まとまった文章を楽しめる人間となると、かなり限られてくるだろう。明治以前の知識人であるならばいざ知らず、今日では、研究者であつても、くずし字解読は難しくなつてきている。寺社に赴き、資料調査できるレベルの研究者となると、人材豊富とは言いがたいと思う。まして大学生では、国文学等を専門としている学生であつても、「くずし字は、むしろ苦手」

という学生の方が多い。はつきり言つてしまえば、大多数の日本人にとつては、くずし字文献は、英語文献よりも難しいのである。中央線や山の手線の中でも、英語のペーパーバックを読んでいる人は見かけれるが、くずし字文献を読んでいる人はこれまでに見たことがない。

果たしてこのままでよいのだろうか。^(注)

我が国には、豊富なくずし字資料があるが、手つかずのものも多い。このままくずし字離れが進むと、極論をいえば、資料の劣化とともに、日本の文化や歴史に関する貴重な情報が失われてしまう可能性さえある。

また、そこまで極端に考えずとも、日本において日本語の資料が楽しめないというのは、何とももつたない話である。誤解のないように申し添えるが、もちろん英語教育を行うなど言いたいわけではない。「英語文献も読めるが、くずし字文献も、ある程度は楽しめる(少なくとも全く読めないわけではない)」という方向を模索するべきではないかと主張したのである。

筆者の立場としては、せめて、国文学・国語学・史学等を専門としている学生には、くずし字のある程度は楽める能力を身に付けさせてあげたいと思う。これからの国際人の教養として、自国の文化について知っているとすることは重要だと思われるからであり、また、何より、くずし字

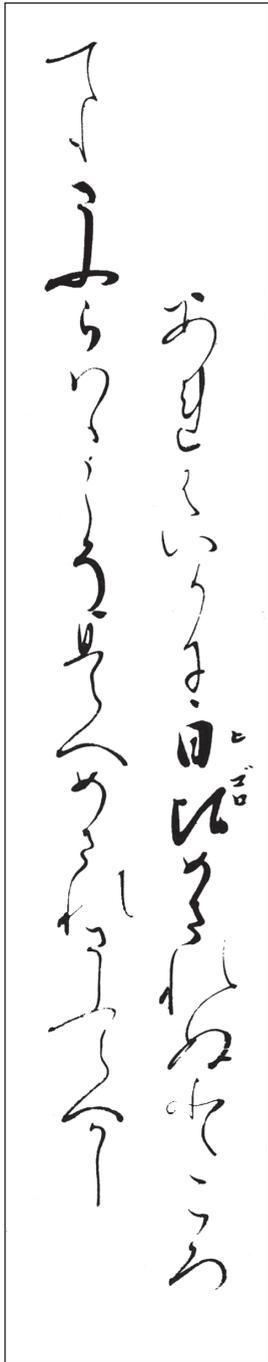
には、翻刻されたものからは感じることでできない、(生涯の趣味とするに足る) 独特の魅力があると思われるからである。加えて、研究者養成という観点からみても、くずし字文献を楽しめる人口が増えれば、結果的に、歴史的な文献を調査できる研究者の数も増えると考えられる。では、学生に、くずし字を楽しむ能力を身に付けてもらうには、どうすればよいのか。

三 従来のくずし字教材の難しさ

— 翻字しても面白くない —

市販されているくずし字の教材には、優れたものが数多くある。しかし、それにもかかわらず、「くずし字は、む

(3)



しろ苦手」という大学生は多い。それはなぜだろうか。筆者は、既存の教材が暗黙の前提としている「(翻字すれば) 学生は古文が読める」という点に難しさがあるように思う。

既存のくずし字教材は、当然のことながら、「実存する実際の資料」を教材としている。このことは、あまりに当たり前で、これまで議論されることはなかったように思うが、くずし字文献は「昔の人の書いた文章」なのである。

次の(3)を見てもらいたい。『平家物語』の「祇王」の一場面で、下座に祇王御前がいるのを見た、仏御前の発話である。

この文を学生が正しく翻字すると次のようになる。

(4)

安連者以可尔	日比女左礼奴登己呂
天毛左不良八、己曾	是部女左礼左不良部可之
あれはいかに	日比めされぬところ
てもさふらは、こそ	是へめされさふらへかし
あれはいかに、日比召されぬところ	
でもさふらははこそ、是へ召されさふらへかし。	

高校までの古文文法をマスターしていれば、この文章の意味は概ねすぐに分かるだろう。しかし、実際には、古文文法を、このレベルでマスターしている学生はさほど多くはない。よって、正しく翻字できたとしても、翻字した文章の意味がよく分からず、結局、「翻字しても面白くない」ということになってしまう。

つまり、次に示すように、くずし字を翻字して意味を把握する作業は、事実上、「古文読解」とセットになっている作業なのである。

(5) くずし字の翻字＋古文読解→意味の把握

Krashen & Terrell (1983) の第二言語習得理論のインプット仮説等の考え方を参考にして考えると、「古文読解」という作業が入っている点において、「i+1」、つまり、「既習のもの＋新たに学習するもの一つ」になっていないのである。^(注1)

より効果的なくずし字学習のためには、「i+1」となる(6)のような教材が必要といえる。

(6) くずし字の翻字→意味の把握

「くずし字を翻字すれば、すぐに理解可能な(面白い)文章が現れる」という教材であれば、学習者はくずし字の翻字そのもの(＋1の部分)に集中できるというわけである。

四 本稿の提案する教材、

及びその特長と応用の可能性

くずし字の翻字そのものに集中できる教材は、本稿冒頭(1)に示した通りである。「くずし字であるが、内容は現代

日本語」というものであり、翻字すると、分かりやすい文章が出てくるので、学習者は、くずし字の学習のみに集中できる。

さらに本節では、本教材の特長(四・一節)と広がり(四・二節)について述べたい。

四・一 手書き字体の多様性を細部まで再現できる

本教材は、いわゆる変体仮名フォントを使用せず、実存する資料(冒頭の例でいえば、『定家本 土佐日記』)にみられる文字を使用している。このような方法を用いることで、手書きの字体の多様性を細部まで再現することに成功している。

当然のことであるが、同じ文字でも、書き手によってその形は大きく異なる。さらにいえば、書き手を同じくする、同一資料中の同一字母であっても、形や大きさにバリエーションが生じることは決して珍しいことではない。変体仮名フォントによる教材では、どうしても画一的になつてしまいい、このような手書きの字体の多様性を細部まで再現することが難しい。この点において、本教材の考え方は、現存する変体仮名フォントとは、一線を画するものである。^(注三)

実際の資料(例えば、定家本)に挑戦する際には、本教

材(冒頭(1)のような定家様バージョン)で学んだ方が能率的であるの言うまでもない。

四・二 幅広く応用できる

本教材の考え方をいれれば、興味に応じて、ありとあらゆるものに応用することができる。

例えば、『平家物語』を、現代の若者言葉風に意識し、それを『高野本 平家物語』の字体で表したとする。具体例を示すと、まず、次の(7)を(8)のようにするわけである(7)は、先の(3)(4)で見た仏御前の台詞である。(8)は、意図的に、かなり軽い感じになるように意識している)。

(7) あれはいかに、日比召されぬところでもさぶらはばこそ、是へ召されさぶらへかし。

(8) いやいやいやいや。普段上座によばれていないっていうのならともかく、いつも上座に座っていた方じゃありませんか。ここへ祇王さまをおよび下さいよ。

その後、この(8)を『高野本 平家物語』の字体で表すと(9)のようになる。

(11)

保具波舟七左以天曾乃止幾保宇
 以武久七四七乃志以止尔寿王徒
 帝以堂

ほくは卅七さいてそのときほう
 いむ(ん)く七四七のしいとにすわつ
 ていた

僕は三十七歳で、そのときボー
 イング747のシートに座つ
 ていた。

ご存じ、『ノルウェイの森』の冒頭部分である。このよ
 うにすれば、『定家本 ノルウェイの森』のできあがり
 ある。^(註五)

長編小説にこだわる必要もなく『定家本 アメリカン・
 ショートジョーク』等のようなものでも面白い教材になる
 と思う。

もちろん、定家様でなくともよい。近年『ONE PIECE』
 (集英社)という漫画が広く読まれているが、この物語
 の主人公の台詞を『正徹本 徒然草』の字体で表現する

と、次のようになる(「海賊王におれはなるっ」という第
 六十一巻の台詞である。なお、感嘆符等は省略している)。

(12)

このようなくずし字を適切な吹き出しに当てはめていけ
 ば、『正徹本 ONE PIECE』になるというわけである(ど
 の教材にもいえることだが、教材化の際には、仮名遣いや
 漢字表記、文字の大きさ等ルールを明確にしておいた方が
 よいだろう。今回は、本教材の多様性を示すために、敢え
 て様々なバリエーションを示している)。

教材化の際には著作権の問題があるので注意する必要が
 あるが、本教材の考え方が様々なことに応用できることは、
 示し得たと思われる。

くずし字を読める人口が減ってきているとはいえ、くず
 し字に対する興味が完全に失われたというわけではないよ
 うである。書店によっては、「古文書が読めるフェア」等
 が催されていることなどもその証拠といえよう。^(註五) 読めるよ
 うになりたいという欲求はあるのである。本教材のような

アイディアを用いることで、くずし字が、現代人にとって、より身近なものになればと考えている。

五 メタ日本語学(メタ言語学)の一環として

本稿では、「くずし字を楽しく学ぶための教材(くずし字の学習が「i+1」の「+1」になる教材)」を紹介した。くずし字学習は、歴史的な日本語を扱う学問では最大の障壁の一つであったが、本教材により、多少なりとも状況を改善できればと思っている。

筆者の専門は、日本語学(言語学)である。日本語学の研究論文は数多くあるものの、一方で、「日本語学を学問する」という視点からの研究はさほど多くはない。しかし、より良い研究を行うためには、「日本語学を学問する」という、メタ日本語学(メタ言語学)的な視点が重要であると思われる。

メタ日本語学(メタ言語学)の対象としては、具体的に、「より公正な学会誌査読システムの模索(福嶋二〇一四)」「より能率的な英語論文の執筆方法の模索(福嶋二〇一四)」「より効果的な英語論文の執筆方法の模索(福嶋二〇一四)」「より効果的な学術雑誌への投稿論文執筆方法の模索(レフリー)とのやりとりや、不採

用通知を受け取った後の対応等も含む)」「より能率的で手堅い調査方法の模索」等が上げられる。本稿は、「より効果的な日本語学教育の模索」の一環として位置付けられるものと考えている。

今後、メタ日本語学(メタ言語学)の観点から、くずし字教材のさらなる紹介や、このような教材を用いた授業の実践報告等を行っていきたいと思う。

注

(一)中野(二〇一)は、近代化前後の状況を踏まえた上で、「和本リテラシー」という言葉を用いて、本節で問題としていることをより詳しく論じている(同書には、非常に重要な提言が含まれていると思われる)。

(二)厳密にいえば、本稿でいう「i+1」と、Krashen & Terrell (1983) 等の第二言語習得理論でいう「i+1」には、いくつかの相違点がある。例えば、本稿でいう「i+1」の「+1」は、言語習得の自然順序(Natural Order)に従った「+1」という意味ではない(本稿では、自然順序仮説(Natural Order Hypothesis)に関与しない言語学習を考えている)。くずし字学習を目的とする本稿と、第二言語習得を論じるKrashen & Terrell (1983) 等では、重なる部分も多いが、当然、重ならない部分も

ある。「i+1」等の概念の異なりも、その違いを反映しているといえる(第二言語習得理論を、そのまま、くずし字学習に当てはめているのではなく、両者の異同を考慮して応用しているとお考え頂きたい)。

(三) 誤解のないように申し添えるが「変体仮名をケータイのフォントへ(中野二〇一・一三三)」という方向でのアイデアを否定しているわけではない。言うまでもないことだが、若者の持つ道具に着目するという視点は大切だと思われる。

(四) ここでいう『定家本 〇〇』(例えば『定家本 ノルウェイの森』)の「定家本」とは、くずし字に定家様を使用しているという意味であり、学術的な意味での「定家本」とは異なるものである。後述する『正徹本 〇〇』の「正徹本」も同様の意味合いで使用している。

(五) 複数の書店で開催されているイベントである。その中の一例であるが、次のところで情報を確認できる。
http://www.junkudo.co.jp/mj/store/event_detail.php?fair_id=5123 (閲覧日二〇一四年九月一日)。

引用文献

漆田彩・北見友香・竹原英里・小野真依子・福嶋健伸 (二〇二二) 「日本語学の研究を英語論文の参考文献欄に書く場合

その一—Journal of East Asian Linguistics では、どのように単行本を引用しているか」実践女子大学 実践国文学会『実践国文学』第八二号、(左) 一〜二〇頁

小野真依子・漆田彩・北見友香・竹原英里・福嶋健伸 (二〇二三)

「日本語学の研究を英語論文の参考文献欄に書く場合

その三—Journal of East Asian Linguistics では、どの

ように論文を引用しているか」実践女子大学 実践国文学会『実践国文学』第八三号、(左) 一〜一九頁

中野三敏(二〇一一)「和本のすすめ—江戸を読み解くために」

岩波書店

福嶋健伸 (二〇一一)

「時代名を含む日本語学の論文の英文タイトルについて—日本語学の成果を海外に発信するため

に」実践女子大学 実践国文学会『実践国文学』第八十号、

(左) 七一〜七八頁

福嶋健伸 (二〇一四)「日本語文法学会誌『日本語文法』の査

読システムの改善をお願いする—「学界水準が弱者を守る」

という思想」実践女子大学 実践国文学会『実践国文学』第八五号、(左) 二二〜三五頁

Krashen, Stephen D. & Tracy D. Terrell (1983) *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*. Oxford: Pergamon Press. & San Francisco: Alemany Press.

資料

『土佐日記』 育徳財団（尊経閣叢刊） ※本稿では『定家本

土佐日記』と表記している。

『高野本 平家物語』 笠間書院（笠間影印叢刊）

『平家物語』 岩波書店（新日本古典文学大系）

『徒然草』 笠間書院（笠間影印叢刊） ※本稿では『正徹本 徒

然草』と表記している。

『ノルウェイの森』 講談社

『ONE PIECE』（第六十一巻） 集英社

付記…本稿に記載された内容は、「実践女子学園知的財産等に
関する規程」に基づく本学園の審議を経て、職務発明
として既に特許出願しているものの一歩である。

（ふくしま たけのぶ・実践女子大学文学部准教授）